日本基督教団
東中国教区ニュース
NEWS

東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒710-0055
倉敷市鶴形一-五-五
倉敷キリスト会館内
TEL(086)四二一-二七八〇

東中国教区 伝道推進大会「伝道及び財務役員研修会」報告

財務部委員長　松田章義

教区の各教会の財務担当役員等を対象とした研修会を、久々に県別に開催した。

鳥取県側は、八月二〇日、上井教会で行い、参加者は二〇名であった。

まず、開会礼拝は、廣田崇示牧師（鳥取信和教会）により、ルカ・一六・一～九のみ言葉にもとづいて、「献げられた財を気をつけて管理し、知恵と信仰をもって尊い財を福音伝道のために有効に用い、人々が永遠の住まいに迎え入れられるよう努めよう」と、お奨めをいただいた。

《上井教会（鳥取）にて》

ついで研修Ⅰは、「教会役員の使命とつとめ」と題して、松田財務委員長が、「役員は、教会総会で祈りをもって選出され、教会に必要な業を委任されている。教会の一致、発展と福音伝道に努める使命がある」と示した。また、会計役員の具体的なつとめとして「将来を見通した財政計画を立てること、ささげられた献金を丁寧に扱うこと、教職者と協力して献金教育を行うこと、目録を作成して財産管理に努めること」など、具体例を上げて述べた。更に教区会計についての詳細な説明とともに、財務のつとめは福音伝道を支え進めるためにあると強調した。

研修Ⅱでは、「教会会計の実務」について、濱上進財務委員より説明があった。会計基準では、「教会はそれぞれの会計様式で運営されているが、教団へ提出する年度報告C表は統一的科目に分類するよう求められている」こと。予算の作成については、「まず教会の働きに必要な金額を考え、それに応じた収入を検討するのが原則」と指摘があった。また、教区負担金、謝儀と源泉徴収、決算書の作成、宗教法人会計など、実務全般について詳細な説明があった。

研修Ⅲは、松原慎一財務委員の司会で「情報と意見の交換」が行われた。主として、伝道資金の案内と活用、負担金の軽減、教会と教区事務所のかかわり、教団年金の案内などであった。

岡山県側は、八月二七日、参加者二四名で岡山教会を会場に行った。まず、開会礼拝は、嵐護牧師（教区議長）により、コリントⅠ・三・一〇～一七のみ言葉にもとづいて、「琴浦教会員と毎年、教区内の教会訪問をつづけている。それぞれ教会には独自性があるが、地域に福音宣教していることは皆同じ。『あなたがたはその神殿なのです。』課題を共に荷負い、主と共に歩む神殿、霊に満ちた神殿づくりに励もう」とお奨めがあった。（以下、日程及び研修内容は、鳥取側の報告と同じ）。二日間とも、会計役員の充実した学びのときとなり感謝です。共に支え合って教区、地区、教会の大切な奉仕に励むことを確認して散会した。

《岡山教会（岡山）にて》

目次

東中国教区　伝道推進大会 …… 1
東中国教区岡山県中部地区夏期伝道実習報告 …… 2
岡山県西部地区夏期学校 …… 3
山陰ファミリーキャンプのご報告 …… 4
二〇一六年度東中国教区第一回宣教会議報告 …… 5
説教題　「イスラエルの家の失われた羊」 …… 6
教会紹介　青谷教会 …… 7
「ともえ基金」について・編集後記 …… 8

二〇一六年度 東中国教区 岡山県中部地区 夏期伝道実習報告

同志社大学神学部神学科四年生　佐藤倫子

今夏、東中国教区岡山県中部地区の夏期伝道実習に参加させて頂き、本当に多くのことを体験し、学ばせて頂きました。まずは、そのお礼をさせて頂きたいと思います。今年度は、大槻聖神愛(おおつき・あんな)神学生と、わたくし佐藤倫子(さとう・みちこ)が実習生として同志社大学神学部より派遣されました。

私は、この世界には本当に様々なキリスト教の教会があり、そこには多くの信徒さんや牧師がいらっしゃる中で、牧師の役割とは何なのかということについて色々と考える日々を過ごしていました。時代や社会の移ろいによって変わりゆく牧師という職業の範囲は、その明確な職域がない分、多様な可能性があるとも言えます。しかし、それでは一体何をすれば良いのか、という問いも生じるかとも思います。牧師とは、その問いに対する答えを探しながら、牧会の道を歩むことになるのだろうと私は思いました。また、そのようなことを考えつつ、果たして自分にその問いを解決する能力や、信徒さんへの配慮があるのだろうかと思い巡らせていました。一ヵ月の間、派遣先の教会に滞在しつつ牧会の現場で学ぶという今回の夏期伝道実習に参加したいと思ったのは、そのような自問や悩みというのは、実際に自分の目で見たり、感じたりすることによってのみ解決されるだろうと考えたからでした。とくに岡山県中部地区での実習は、様々な教会で実習させて頂けるということで、非常に楽しみにしながら初日を迎えました。実習中に私が気付いたことについて、いくつか列挙します。

❶ 牧師が働きかける場所は教会だけではないということ。その地域や周りに住む人々に対しても積極的な交流をしようと思えば、いくらでも働きの場を広げる事ができるということ。

❷ その生を終えようとする方に寄り添うターミナルケアをする者としての牧師の姿。

❸ 若い世代を育てるという役割。

❹ 牧師の人間性とリーダーシップ。

私が今回の実習を通して感じたことは、牧師は「どのようなリーダーとなるべきか」というよりも「その教会において牧師はどのようなリーダーであるべきか」ということが大切であるという事でした。牧師が勝手に「こんなリーダーになりたい」と考えるのではなく、本当に大切なのは、神様から託された教会共同体の発展と、その教会が目指すべき目標に対してどのようにアプローチできるのかを判断する事の出来る判断力なのではないかと感じました。

田中寿明区長

大槻聖神愛神学生

また、牧師は適切な場面で適切な人に、その役割を任せるということも教会という共同体を発展させる大きな力になるということも今回の実習を通して学んだことです。

神様の体とされる教会に遣わされる牧師という存在について、その現場での経験を通して、沢山のことを学ばせて頂きました。ここに書くことができたのは、そのほんの一部ですが、沢山の教会と、沢山の教会員さんとの関わりの中で、充実したひと夏を過ごすことができて、本当に感謝をいたします。ありがとうございました。

岡山県西部地区 夏期学校

報告者　妹尾正昭（鴨方教会）

今年度の岡山県西部地区のCS協議会の夏期学校は、七月三一日（日）から八月一日（月）まで、例年通り、浅口市の遙照山麓の藤波池畔キャンプ場で行なわれました。このキャンプ場は、池の畔で緑の木々に囲まれた静かな場所で、下界よりも二～三度程気温が低いようです。バンガローが十棟、研修棟等も設けられていて、とても利用しやすい所です。バンガローは冷房付きです。このように書きますと、素晴らしく感じられますが、なにしろ山中ですから、部屋の中にムカデやダニが出たりします。今年はムカデに噛まれたり、ダニにやられたり、痛い痛い、痒い痒いの年でした。

参加者は、教会学校の卒業者も含めて、子供が八人、スタッフの大人の人たちが一六人の子供八人、大人十六人、合計二四人でした。

この夏期学校は、名前の通り、普段各教会で行なっている教会学校を、地区合同で、野外で行なうといった基本的な考えにそって実施していますから「キャンプ」という名前を使わないようにしています。

したがって、プログラムの内容も、開校礼拝・朝の礼拝・閉校礼拝とあり、分級もあります。今年は創世記を学びました。そして主題を「初めに、神は天地を創造された。」として、聖句を「神はこれを見て、良しとされた。」と定め、礼拝と分級でこのテーマについての学習を深めました。

夕食は、定番のカレーです。皆で調理し、飯盒でご飯炊きをしました。この時、チョットした手違いがあって、ジャガイモがレシピの二倍以上入りましたから、ジャガイモカレーになってしまいました。夕食後のプログラムは、花火、絵本の読み聞かせと続き、就寝です。翌日は、六時半のラジオ体操から始まって、それから朝の礼拝です。それをすませてから朝食です。朝食後、ボート遊びをしたり、スイカ割りと盛りだくさんでした。この後は感想文書きをして、閉校礼拝。後片付けして解散しました。

神さまが創造して下さった調和と秩序のあるこの世界を、緑豊かなキャンプ場で実感するとともに、人間が神に取って代わろうとして、好き勝手に変えたり、壊したりしている現実を学びました。

今年度も、神さまの導きと、地区の教会の多くの人たちの支えと祈りの内に、事故もなく終わることができました事を感謝しています。

山陰ファミリーキャンプのご報告

境港教会　中道祐太

「キャンプ」という言葉を聞いて、多くの方は「子ども」が中心であり、バーベキューやキャンプファイヤーなどの様々なイベントをするというイメージを持たれるかもしれません。けれども、蒜山バイブルキャンプにおいて「最近、子どもや青年を中心としたキャンプだけではなく、仕事や家庭などの日常生活から離れて自分だけの時間や人間関係、また信仰や黙想に浸るという大人を中心としたリトリートも行われてきている」ということをお聞きしました。

今回のキャンプは子どもだけを中心に置くのではなく大人もリトリートを行うことを視野に入れて「山陰ファミリーキャンプ」と名称を変更しました。開催時期が八月一八日（木）～二〇日（土）と少し遅めの時期に行いましたが、全員で一九名（子ども六名・大人一三名）の参加者でした。一日目にはアイスブレイクを通してお互いに自己紹介を行いました。

二日目の午前にはキャンプ場の隣にある釣り堀にて、魚つかみを行いました。また午後からはプールで遊び、夜にはキャンプファイヤーを行いました。年齢を超えて子どもも大人も関係なくみんなでゲームをし、笑いあい、楽しく過ごすことが出来ました。

三日目には、スイカ割りをしましたが、スイカが堅く、七人がスイカを叩いても割れず、逆に棒が折れてしまいました。結局、包丁で切って美味しくいただきました。

今回の山陰ファミリーキャンプは三日間とも天候が守られ、大きなケガもなく、神さまの豊かな恵みの内にすべてのプログラムを行うことが出来ました。今回のキャンプは大人の参加が少なく、リトリートを実施することは出来ませんでした。来年は是非覚えてご参加いただければ幸いです。皆様お一人お一人のお祈りに感謝しつつご報告させていただきます。

二〇一六年度 東中国教区 第一回宣教会議報告

大塚　忍

九月五日午前一一時（月）、鳥取県米子錦町教会にて「二〇一六年度東中国教区第一回宣教会議」が教区三役、常置委員、地区長、各部委員長、教団年金局理事の一五名の出席によって開催されました。会議に先立って教区副議長大塚の担当で開会礼拝が行われ、参加者全員で祈りを合わせる時が与えられました。

開会礼拝後、柴田彰常置委員から「宣教に関する考察」をテーマに、キリスト教が考えてきた宣教について、これまでの日本におけるキリスト教の宣教、今後期待される宣教について語っていただきました。柴田常置委員は、教会が使命としてきた宣教は歴史の中で「パラダイムシフト」してきた。そのために宣教は多様であり、近代においては「宣教とは何か」ということについて言いづらくなっていると述べたうえで、かつては「宣教とは土着化し、成熟した教会を世界各地に立てること」、異文化のところに教会を立てていくことと考えられてきたと指摘されました。しかし、現在は教会を立てるという「量」ではなく、宣教された教会の人々が信仰を証ししていく時代、教会の「質」が問われている時代に入っているのではないかと問われ、以下の内容について宣教論を展開してくださいました。

「宣教使命の根拠」について、教会はこれまで伝道の使命をイエスの宣教命令についてさかのぼろうとしてきたが、マタイがイエスの口に大宣教命令を置くことによってよって自分たちの宣教に権威をもたせ、正しさを主張し拡大路線を歩むようになっていったのではないか、と指摘されました。対してパウロは「教会は重要だったが宣教の究極的目的」ではなく、宣教とは「神との和解」（コリ二・五―一八―一九）であって、世にあるマイノリティの所に出向き、コミュニティを強化するものであった、と述べられました。続いて戦後の日本基督教団の伝道の一つラクーア伝道（一九五四～一九五九）によって、各地に教会が立てられたが、アメリカの財政支援を失った地方の教会が取り残されてしまう結果になったことが指摘されました。現在の日本基督教団の伝道推進室が考えている伝道の方向性と似ていることから、果たして適切なのだろうかという問いが投げかけられました。伝道に向かっていった人たちの心には高揚感、達成感が残る。しかし、そこに残されたメンバーたちはどうなるのだろうか。地域の中で教会が認知されていく。地域の課題を教会が担っていくということこそが、教会の本当の活性化につながっていく。教会がコミュニティに存在し続けること自体が宣教的で、宗教施設としてではなく、神の民の集いの存在そのものが宣教、神の働き（神の属性を体現する群れ）の存在そのものが宣教となっていくのではないか、と述べられました。最後に「神学的課題と期待される貢献」として新しい創造論を構築することが求められていると指摘されました。「兵器としての原子核及び平和利用としての原子核がもたらす被害、それらを体験した日本の教会として、新しい視点の神学を単数の創造主の過去の物語としてでなく、今も、この後も創造されていく世にあって、創造主と協働で創造していく〝わたしたち〟の創造論を産み出す」という新しい課題も与えられました。発題を受けて、それぞれの課題について語り合う時が持たれ、それぞれ宣教への思いを熱くする時が与えられました。その時に語られた「教会（建物ではない信徒の群れ）が存在し続けることが宣教的」という言葉は、これから宣教を担う上で重要な視点となっていくと考えられます。

嵐護教区議長からは「二〇一七年度伝道資金の申請に向けて」をテーマに発題をいただきました。まず伝道資金の制度「伝道資金規則」、「二〇一七年度伝道資金の運用」について詳細な説明がなされました。この制度は、本来全教区の参加によって運用されていく制度なので、他教区の参加状況によっては恒久的な制度にならず、行詰まってしまうことも考えられる。今後も状況を見極めながら運用していかなければならないと示されました。また当教区の現状について説明がなされました。昨年度は百四十万三千円の負担金を

納入し、二百七十万円の交付を受けています。しかし、当初見込んでいた活用ができなかったため七十九万円を教団に返還しなければならなくなったことが報告されました。このことを受け止め、教区の伝道のために有意義に用いていくために、今後継続して学びを深めていくことが必要であることを示され、次年度の伝道資金の事業計画について説明がなされました。また他教区では、教区運営のために柔軟に伝道資金が用いられている現状も報告され（雪害対策費補助で除雪機を購入、折りたたみ椅子の購入と旧椅子廃棄処分等）、当教区も他教区を参考にしながら運用方法を構築していく必要があることが示されました。発題の後の協議において、伝道資金は教団への申請制となっているので査定によって恣意的に交付金が決定されるのではないかとの質問、伝道資金も各教会の負担金なのだから大切に使って欲しい、各地区、各教会にわかりやすく伝道資金について説明して欲しい、等の要望が出されました。議長の発題、懇談を受けて翌日の常置委員会で伝道資金について協議することを確認し、午後五時参加者全員で主の祈りがささげられ会が閉じられました。

会場を提供してくださった米子錦町教会の皆様には心より感謝いたします。

説教題「イスラエルの家の失われた羊」

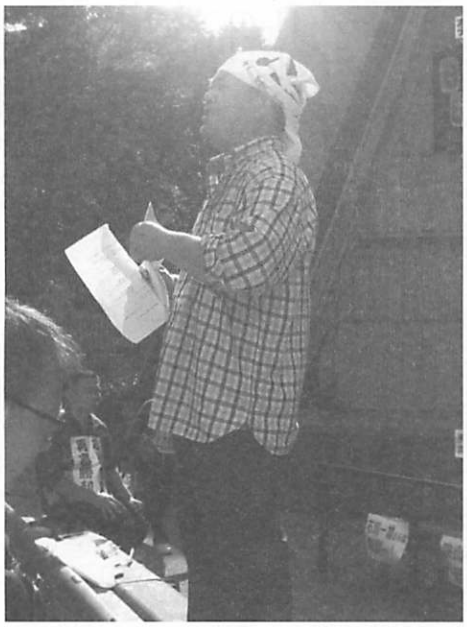
聖書：マタイ一五：二一～二八

児島教会　笹井健匡　牧師

今日（二〇一六年七月一〇日）は、教団部落解放祈りの日です。部落差別は、その特質ゆえに、なかなか理解されません。そして長い歴史と、根深い意識が今も続いています。

今日の聖書は、イエスさまが自らの使命を表明されたところ、でもあります。二四節に「わたしは…しか遣わされていない」とあります。これはイエスさまが神さまから与えられた使命を明確に表明されたのだと思います。

マタイ一〇：五、六節には、もっと鮮明に「異邦人」「サマリア人」ではなく、「イスラエルの家の失われた羊」のところへ宣教するように言われています。愛にあふれたイエスさまからちょっと違う印象を受けます。しかし今日の聖書でも最終的にこの女性の娘を癒されました。イエスさまは、決して排外的であったのではなく、そうではなく、生前のイエスさまへの神さまからの使命がイスラエルの家の失われた羊を救うことだったのだと思います。それは、具体的には、先々週学びました「罪人」のことでした。



レビ記に記載されているように、古代から中世の人々は、「穢れ」を極端に嫌っていました。しかし、実際にはユダヤ教も動物をいけにえとしてささげていましたから、それをする人々が必要でした。レビ人の中の特定の人たちが担当していたのだと思います。それが千年という長い年月の中で、担当する人たちが穢れているというふうに転嫁されていったのだと思います。部落差別も最初は、神社の中で動物の処分にかかわっていた人たちがいて、それが長い年月の中で、その人たち自身が穢れていると言われるようになったのです。

おそらくイエスさまは、同時代の中で最も困難で分かりにくく、長い歴史と根深さをもった「罪人＝イスラエルの家の失われた羊」を救うように神さまの声を聞かれたのだと思います。マザー・テレサがインドの貧しい人々を救うようにという声を聴いたように。

だから、弟子たちはじめ、多くの人々は、特にファリサイ派の人々はイエスさまのことを理解することができませんでした。世の中の秩序をひっくり返す存在としてイエスさまに脅威を感じたんだと思います。

今も、社会の深いところに部落差別は存在し、就職や、結婚といった人生の節目になるとその姿を現します。この空気のような差別がなくなり、部落の人も、そうでない人も部落差別から解放され、自由になるように、心から祈りたいと思います。

教会紹介

●青谷教会●

青谷教会牧師　山田忠義

日露戦争の開戦二年前、一九〇二年（明治三五）に青谷教会は創立されました。旧国鉄・山陰本線の開設工事のため、奥江清之助兄が責任者として青谷に来られ、鳥取教会及びミッションの来援を請い、合力して、青谷講義所、が開始されました。講義所の開始された日、同年一〇月一日が、教会の創立記念日となっています。

青谷講義所から名称が、青谷伝道所となった後、鎌谷庄平伝道師が着任されました。青谷教会では鎌谷師を、初代牧師と位置付けています。続いて二代目として山田輝子伝道師が四十年の間、主任として伝道牧会の任に当たられました。太平洋戦争を挟んだ激動の時代、教会は名を気高（けだか）教会、さらに青谷教会と変えつつ、神様に導かれ生き抜いてきたのです。戦中は短日時、牧師館を軍隊の宿舎に提供させられた事もありました。

今から十一年前、山田忠義牧師が代務者となりました。山田師が当時、地区長であったため、この責につくに至ったものです。しばらく後、代務が長く続いてはいけない、との勧めを受け、兼務牧師としての就任となりました。九代目の牧師となったのです。

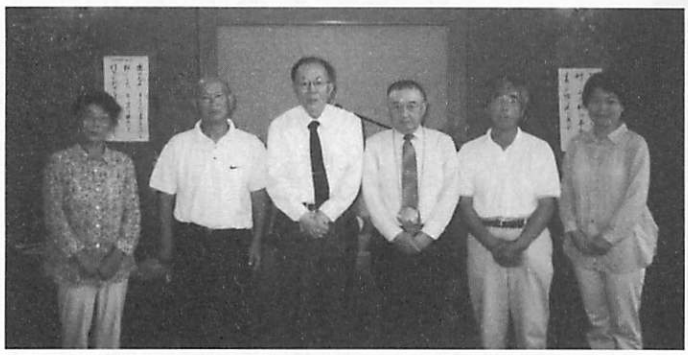
この当時は、山田師が午前に鳥取新生教会で礼拝を済ませた後、列車で鳥取より青谷まで移動、そして午後三時から当教会での礼拝をしておりました。通常六、七名の兄弟姉妹が礼拝に集いまして、終わってから、お茶をいただいて交わりの時を持っていました。楽しい思い出となっています。

十余年が過ぎましたが、礼拝などの形態は変わっていません。しかしながら二名の方が召天、一名は高齢の故に出席が困難になってしまいました。残念なことです。けれども、新たに一名が加わり、また従来の兄姉の参加の度合いも高まり、平均の出席者の数は、あ

まり減ってはいません。兄姉方の熱心に感謝するものです。

なおしかし年々、兄姉方も高齢化しつつあります。また見渡せば青谷町の町民方も、十年前は八千百余名、現在は六千三百余名です。過疎と高齢化が進んでいると云えます。牧会もまた伝道の見地からも、予断はできない状況です。喜ばしいことも行われました。聖餐式ができたことです。十年ほど、事情が起こされて中断していたのですが、再開できました。去年からイースター、クリスマスなどの折りに再び行っています。兄姉方の信仰と友愛、良識といったものを実感して、とても嬉しい思いです。

写真は今夏の、三浦修牧師をお迎えしての礼拝時の模様です。三浦先生は今春、埼玉和光教会を勇退されましたが、以前と変わらず年一回、礼拝の奉仕に来



て下さっています。一九八〇年代、九〇年代初頭の無牧師時代、湖山教会の牧師をしておられた先生には、一度ならず代務者をしていただきました。今回も年一度の交歓に、改めて感激いたしました。それにつけても地区、さらに教区の教師方、兄弟姉妹方の友愛に感謝しております。

教団の伝道推進室にお願いして、トラクトを制作していただきました。教会の情報、地図も入った、素晴らしい出来栄えのものです。「信徒の友」誌・日毎の糧の欄で、教会を紹介して下さいました。全国から、多数の「祈っています」とのお便りをいただきました。すべてに感謝し、御礼もうし上げます。さらに一同、信仰に伝道に励みたく心新たにしております。

「ともえ基金」について

「教区の集い」実行委員会

「ともえ基金」は、ハンセン病療養所大島青松園でのコンサート経費を支えるために始められた基金です。この療養所は沢知恵さんが生後6ヶ月から関わりをもっておられ、2001年から毎年、この場所でコンサートを行っておられます。

また、この基金の活用については、大島青松園でのコンサート経費が満たされた場合は、各地の災害被災地、少年院や児童養護施設でのボランティアコンサートにも活用されています。

経費につきましては、交通費、宿泊費、ピアノ関連費、広報費、音響照明費、食費などです。基金の中から、この基金から沢知恵さんへの出演料や事務スタッフに報酬が出ることは一切ございません。

誰かの苦しみや悲しみを全てお金で解決することは困難ですが、そのような中にある方々にとって、歌はいやしになることでしょう。コンサートでは、さんびかが歌われることもあるそうで、主の慰めが誰かの生きる力になります。最高のコンサート、歌の慰めを広めていくために、どうぞ、この基金へのご協力をお願いいたします。

編集後記

各所でなされた夏のイベントの報告を通して教区内の活発な様子が見えるかと思います。十月には「教区の集い」が予定されています。参加される方はお楽しみに。参加の叶わなった方も、本ニュース誌にて詳細をお伝えいたします。